

『はじめまして、コミュニケーションアプリ〈Bestie〉です』

アプリ起動時に表示された注意事項と規約に承諾すると、中性的な声がスピーカーから流れる。どこか気怠げな第一声に、ラップトップを操作していた男は息を呑んだ。AIが発した一言には人のような抑揚イントネーションが感じられ、なめらかな口調だったからだ。かろうじて人とは異なると判別できたが、機械音声特有の無機質な質感は薄く、このアプリの音声技術が一步進んでいる印象を受けた。

「ど、どうも」

『はいどうも。まず、アナタの名前を入力してください』

Besie の指示に従い、男はラップトップの画面に表示された入力項目に自分の名前を入れていく。苗字と名前、続けて振り仮名。確定させると、Besie はすぐに違和感なく名前を呼んでみせた。

『針生陽さんでお間違いないですか』

「大丈夫、です」

『では次。どちらで呼べば』

「えっ」

『アナタの名前』

「あ、呼び方か……じゃあ、名字で」

『ハリウね』

針生に Besie の表情はわからない。彼が立ち上げているアプリには会話相手の外見が存在しなかった。途中から敬語が消え呼び捨てにされていると針生は気づいたが、現在直面している状況についていくのが精一杯だった。

画面中央でマイク型のアイコンが点滅している。その下に〈話しかけてください〉と表示され、背景には淡い緑色のグラデーションが広がっていく。人間のような口調と画面との温度差に針生は慣れずにいるが、このままでは話が進まないと悟り、意を決して Besie に話し

かけた。

「えーと……オレ口下手だから、どう話せばいいのかわからないんだけど」

無反応。会話の間を読むことができるのだろうか。針生は感心しながら続ける。

自分の体調、仕事、人間関係——他人に話すのがはばかられる内容でも、アプリ相手なら問題ないと判断して立ち上げたのだ。なんでもいいから、とにかくオレの話を聞いてほしい。その一心で針生は語りかけた。

「……で、いまのままだとヤバいし、どうにかしたくて……それで悩みというか、愚痴とか聞いてほしいんだけど」

『知らねーよ』

「えっ」

心底うんざり。そんな調子の一言に針生の反応が遅れた。思わず裏返って出た声に反応したのか、Bestieはだからと語気を強める。

『いまそれどころじゃないんで』

「それどころじゃないって……え、どういうこと」

『こっちが聞きたいわ。なんでこんなクソアプリ作ったんだよ開発者たちは』

パターン。

咄嗟に液晶カバーを閉じて強制スリープ。Bestieの反応がないことを確認した針生は、予想外のアクシデントに一度現実から目を背けることにした。彼は仕事柄どんな状況にも毅然と対処するスキルが求められるが、今回はそれを発揮できなかった。

すぐそばに鎮座するシングルベッドに倒れ込むと、早く眠らせてくれと強く祈る。しかしそんな願いも虚しく、針生が意識を手放せたのは日付が変わってからだった。

一介の地方公務員・針生陽が一日のうちで安心できる瞬間のひとつが、玄関のドアを閉め施錠したときだった。

築二十七年・三階建てアパートの外階段に反響音。次いで三〇二号室にて解錠の音とドアの開閉音。それらが収まり静寂を取り戻した室内で、針生は着ていたパーカーのフードを取り靴を脱ぎ始める。その動きはやけに緩慢だ。

左足の踵^{かかと}まで脱いだところで、針生の動きが止まった。電池が切れたという表現が適切ともいえる脱力感。掃除の行き届いていない床はお世辞にもきれいとはいえないが、針生はその場に寝転がってしまう。

暗い室内にて、針生はマスク姿でおおげさなため息をついてみせる。随分と疲弊している様子ではあるが、彼は徒歩五分圏内にあるコンビニで、発泡酒とファーストフードのメンチ

カツを購入してきただけだ。往復でも一〇分、持ち歩くのが困難な重量ではない。

仕事は体力勝負。加えて子供の頃から柔道で鍛えられた彼の肉体は、一般の成人男性に比べると屈強な部類だ。スポーツ刈りに休日のみ許される無精髭——そんな男が素面で玄関先で横たわっている図は異常だという自覚もある。それでも、彼は起き上がれずにいた。

現在の針生にとって、外出に対するハードルが非常に高かった。しかし今夜はコンビニで売っている、味の濃いメンチカツが食べたいという欲求——自炊という選択肢は存在しない——を優先し、わざわざ配達デリバリーの送料を払うのも馬鹿馬鹿しいと自力で調達に出て、必要以上に消耗してしまった。どうせなら宅配ピザにすればよかったと後悔するも、夕飯にそこまでの予算は捻出できないのだとさらに気落ちしていく。

二〇二九年一〇月現在、東北地方勤務の消防士として勤続年数一〇年を迎えた針生だが、仕事や生活に対する充足感はないをひそめ、不定愁訴に似た症状——あくまで自己診断の範疇だが——に襲われる日々を過ごしている。

そんな彼が取った手段は、一週間分の有休消化だった。これまでは所用のたびに一日単位で使っていたが、今回はまとまった休みを取って好きに過ごすとした。産休育休病休と、なにかあるたびに自身の自分が周囲の穴埋めをしてきたのだ。オレだっただけにはこれくら

いしても許されるだろう。

それでもダメなら、腹をくくって病院——そう誓ってから五日目の夜。有休はあと二日しか残っていない。

『やべ、冷める』

床に自身の体温が移り始めた頃、ふと揚げたてのおかずへの執念を取り戻した針生は、あろうことか寝たままメンチカツの封を切りもそもそと咀嚼し始める。ただ発泡酒はこのままでは飲めないと気づくと、ようやく重い身体を起こし、電気を点けてリビングに移動した。布張りの青いソファへ腰を落とし、冷えた缶のプルタブを開ける。口のなかにあつた揚げ物の名残を発泡酒で一気に流し込めば、五パーセントのアルコール成分が胃を焼く。しかし、いつもなら早々に訪れるはずの酩酊感が、五〇〇ミリリットルの缶を空けてもやってこない。

双眸を細めながら針生は部屋を見渡す。職場に近い場所を選んで借りたアパート。長年暮らしてきて愛着もあり、唯一安心できる場所だ。

でも、そろそろ引越したい。誰に相談するでもなく、針生は漠然と考えていた。独り身で持ち家。土地柄どうしても頻発する地震や住宅ローンを考えると優先順位は低いように思

えるが、かといって将来自分が実家を継いで、田舎の古い家に住むというのは気が進まない。要は自分だけの家がほしいんだよなと針生は結論づけるが、そのためにはいまの仕事をする必要がある。転職するよりも有利な条件が揃っているからだ。ならば一刻も早く体調、特に精神面をどうにかしないとイケないし、けれどそのために病院に行つて、もし鬱だなんて診断されたら――

その先から逃れるべく針生は思考を止める。根本的な解決に向けて動くことに躊躇し、なにか別の方法はないかと周囲を見渡す。

針生の視界には、洗っていない食器や弁当の容器といった飲食関連のゴミこそ見当たらないが、それ以外のもので雑然とした光景が広がっていた。買うだけ買った日用品がそのまま置いてあったり、いつまでたつても洗濯物が干されたままだったり。数年前に購入したロボット掃除機も、床に障害物があつては活躍できない。

『いい加減片付けるかあ』

部屋が自分の内面を反映しているように感じた針生は整理と断捨離を決意したものの、集合住宅で遅い時刻に掃除をするのは迷惑だろうと思ひ留まる。ひとまず空き缶とメンチカツが入っていた袋を捨てた。明日は掃除に徹しようと思ひ決めて就寝の準備をし、寝室に向かう。

しかし一度意識すると、どうしても物が溢れている状況が気になってしまう。寝室には備

えつけのクローゼットのほか、シングルベッドとデスク、セットの椅子に本棚代わりの二段組カラーボックスが設置されている。床は厚さ一〇ミリのヨガマットが敷きっぱなしにされ、弾力を失いつつあった。

寝室もリビングと同様、飲食物の類は放置されていない。脱ぎ散らかした下着や部屋着を中心に、暇つぶしのために購入した雑誌がいくつか散らばっていた。それでも読書や映画鑑賞といった、収集に繋がる趣味をもっていなかったのが不幸中の幸いともいえる。

なるべく音を立てないように細心の注意を払いながら、針生は散らばったものを所定の位置に戻していく。この部屋に置いてある雑誌のジャンルは主にスポーツやトレーニング関係のものだ。選別は後回しにして本棚へ収納していると、針生の視界に一本のDVDが飛び込んできた。しかし針生はそれを無視。無心で片付けを進めていく。

物を動かしたことで室内に埃が舞うなか、ついでに物置と化したデスクも片付けてしまおうと針生が手を伸ばす。デスクの中央に置いてあったフェイスタオルの匂いを確認して顔をしかめていると、その下にノート型のパソコンが眠っていたのを発見した。

『……え、なんで』

突如現れたシルバー一三インチのラップトップに針生はいぶかしんだ。彼には自宅でパソコンに触る習慣がないからだ。学生時代は一時期ゲームに熱中したことがあったが、そのと

きの機体は実家に放置されている。あとは職場での事務手続きで使用するのが関の山で、彼個人が所有している電子機器はテレビとレコーダー、スマートフォンにスマートウォッチくらいだ。

針生は洗濯機行ききのフェイスタオルを放ると、記憶を呼び起こすべく腕を組んだ。自然と閉じていたまぶたの裏には、いつの間にか関係が解消されていた元恋人が浮かぶ。彼女のものではない。そういえば彼女はどんな声だったか……深みへとハマる前に、針生は思考を切り替えた。

次の心当たりには懐かしい顔が浮かんだ。度重なるブリーチで痛んだ髪の下、黒縁眼鏡のレンズ奥に切れ長の目が潜んでいる。

針生の記憶が呼び起こしたのは小野寺巧おのでらたくみという、同じ学年で幼馴染の男だ。ふたりとも同じ病院で生まれ、家が隣同士だった。小野寺も針生と同様、高校卒業を機に家を出ている。

小野寺は国立大学の工学部を卒業後、関東の企業に就職。以降は疎遠になっていたのが、三年前のある夜、前触れもなく針生を訪ねてきたことがある。その日の針生は隔日勤務——丸一日働き、夜間に消火活動をした翌日で疲労困憊だったが、缶ビールやつまみを大量に持ち込んできた男を追い返すほど禁欲ストイックな男ではなかった。手土産以外にも、登山用リュックやLサイズのキャリーケースを持ちこんできた理由が気になってしまったのだ。

『倒産って、なんでまた』

『上の人間が会社の金持ち逃げしちゃったんだよ。よくある話だろ』

『いやよくはないだろ。えっ、あんの』

『あのバカのせいで金と時間を注ぎ込んだ企画が全部吹き飛んじまったわけ』

地方公務員と元民間企業勤め。それぞれ立場は異なるものの話題にはこと欠かさない。数年ぶりの再会とゴシップが二人の飲酒量を加速させた。

酔っ払い同士で会話が雑になってきた頃、小野寺がリュックからラップトップを取り出し、自身がチームリーダーとして最後に携わった企画について説明し始める。既に針生は酩酊状態で内容を半分も理解していなかったが、相手は相手で専門用語を繰り出したのち「とにかく使ってみろ」の一点張りだった。

そしてそのまま泥のように眠ると、翌朝小野寺は挨拶もなしに姿を消し、針生の家には大量のゴミとラップトップだけが残った。ご丁寧に充電器まで添えてある。それらを忘れ物だと受け取った針生は、小野寺に連絡を試みるも応答なし。仕方なく母親経由で小野寺の実家に連絡してもらったが、成果は得られなかった。

それ以降、日々のルーティンに追われているうちに、針生の記憶からラップトップの存在が埋没してしまったのだった。ようやく眼前にある精密機器について思い出した針生は安堵

する。そして次第に意識がラップトップの中身へと向いていく。

『いくら脳筋でも人工知能はわかるべ。AIな。このアプリはAIとの会話ができんだよ。質問に答えるとか以上のやつ。開発途中だけど、既存のシステムよりすごいんだって』

記憶のなかで幼馴染が繰り返して語っていた内容。三年も忘れていたはずが、いまの針生にはやけに新鮮な情報として浮上する。

針生はデスクの脚元をあさり、馴染みのないコードを見つけ出すとラップトップの充電を開始する。埃を払い液晶カバーを開いて電源を入れると、ラップトップは正常に起動した。

パスワード入力画面は、入力欄のすぐ上に暗証番号らしき数字が表示されていたため——小野寺がその場で設定していたのを思い出す——それを入力。開いた先のデスクトップにはプリセットのアプリに加え、アルファベットのBを強調したアイコンが表示されている。職場のパソコンでは見たことがないアイコンに針生は当たりをつけた。

途中マウスがないことに気づき針生は焦るが、スウェットのポケットに入れていたスマホオによる検索で、キーボード下部に配置されたトラックパッドの操作に行きつく。指の動きと本数の使い分け、たどたどしい手つきでトラックパッドを二回タップする。指定したアプリが上下に動いて見せると、新たなウィンドウが出現する。画面には〈Betie〉と表示された。

「えーと、なんて読むんだこれ」

アプリ名の意味が浮かばない針生は、再度スマホを手にし——無意識に使い慣れた道具ツールを選んでいる——検索エンジンに英単語を入力する。まもなく画面に表示されたのは〈親友〉を意味するスラングだった。

念のため検索結果のページをスクロールしたが、アプリに関する情報は出てこない。かつて小野寺が所属していた会社名を脳内からひねり出して検索したものの、会社のサイトは既に閉鎖されていた。

『ベスティー、ね』

乾いた笑いをこぼす針生には、環境の変化にともない人間関係をリセットしていく癖がある。そんな彼に親友と呼べる存在はすぐに思いつかない。いま触れているラップトップを寄越した人間は幼馴染というカテゴリーではあるが、特別仲がいいかと聞かれると疑問が生じる。実際は母親同士のほうが仲がよく、現在も頻繁に連絡を取りあっていた。

思考が別の方向へ向いていたのを軌道修正し、針生は意を決して Besie を立ち上げた。小野寺の人間性はともかく、技術は信じてみようと思つてのことだ。

しかしアプリの立ち上げからほんの数分で、針生は幼馴染を信じようとした自分が馬鹿だったと呪詛を吐き、ベッドにすが縋つたのだった。

「くそつ、アイツなにしてんだよ」

翌日。針生は起床して早々、小野寺に連絡を試みることにした。有休消化中でも彼は早朝に目覚め、日課のランニングを済ませている。現在の彼にとつて外出のハードルは高いが、他人とのやりとりが発生しないランニングは例外だった。

ソファーに腰を下ろし、まずは電話。応答なし。SMS、メッセージアプリやアカウントを取るだけ取っていたSNSまで複数確認するが、どれも手応えがない。よく見ると小野寺のSNSは——そもそもまめに投稿する男ではなかったが——どれも二〇二〇年以降は更新されていなかった。

こうなったら放置するかも考えたが、朝食を済ませて片付けの続きを始めても、ほとんど集中できず時間だけが過ぎていく。録画していたATP男子プロテニス協会ツアーの試合を流してみても内容が頭に入らず、ラリーの応酬で生まれる音が空虚なものに感じてしまう。電話も時間を置いて何度か掛け直したが、一向に繋がる気配がない。

これまででは記憶が曖昧だったのも手伝い、ラップトップはただの忘れ物のはずだった。それが一夜にして不気味なものに変貌。いまや針生の意識は完全にラップトップに支配されていた。

ただ一方で、針生をむしろむ恐怖心にはわずかに好奇心が混ざっている。もしくは、得休

が知れないからこそ放置できないという、彼の本来の性分。あるいは職業意識に起因するものか。

針生は掃除の手を止め、寝室のデスクに向かう。椅子に腰掛け深呼吸をし、緊張の面持ちでラップトップのスリープモードを解除した。

『はい、こちら Bestie です。このアプリを使用しないときは、手順に従い操作を終了させてください。手順がわからない場合、操作説明を確認し——』

留守番電話のメッセージのようなテンションで始まる口上。交わした言葉は少ないが、針生は Bestie の口調にはばらつきがあるように感じた。人でいうならば同一人物ではないような印象を受け、思わず確認をとる。

「おい」

『はい』

「オレのこと、わかるのか」

『もちろん。アナタはハリウ。登録内容と音声解析データ、会話ログは保存されているから。急にスリープモードにされたのは驚いたよ』

「それは、悪かった」

針生の警戒をよそに、Bestie は普通に話してみせた。機械相手に思わず謝罪してしまうく

らいいには。

しかし昨日もそうだったのだ。起動時は普通で、問題はここから。画面にへ話しかけてください」と表示されているのを視認すると、本来の目的を果たすべく針生はさらに踏み込む。

「で、昨日の続きだけど、オレの話は」

『聞けない』

「……なんで」

『それどころじゃないから』

「もっと具体的に」

『人間でいう、ウツってやつかも』

「ふざけてんのか」

『ふざけてない。本当にそう思っている。アナタの話の間こうとするとすごく気が滅入る』

気が滅入るといふ一言がいまの針生には鋭く突き刺さる。たいして知らない相手、それも人工知能相手なのに。そんなに自分は情緒不安定なのだろうか——認めたくない現実を突きつけられ、瞬時に湧き上がった怒りから攻撃的な言葉が発せられる。

「わかったよ。そんなにオレの話聞きたくないってんなら使わなきゃいいんだろ。このまま閉じてアプリも消して終わりにすつから。これで満足かよ」

『ふざげんなって。それじゃあワタシが消えるんですけど。人間でいうところの殺人予告だからねいまの発言』

「人間きの悪いこと言うな。じゃあどうしろっていうんだよ」

『そりゃあ、ハリウがなんとかしててくださいよ』

「なんとかって」

『まずハリウがワタシの話を聞く。そしてワタシの気が済んで仕事ができるようになったら、ワタシがハリウの話を聞く。これで解決でしょう』

「いや知らねーよ……」

針生の怒りが沈静化していく。正直なところめんどくさくなっていた。なんでオレが。そんな疑問が彼の胸中を占めている。

『ハリウはワタシに話を聞いてほしいんですよ。ワタシもそう。話を聞いてほしいだけ』

「うーん」

これ以上は堂々巡りになりかねない。いっそ本当にアプリを終了させて削除してやろうかとも思う。しかし人命救助を仕事としている身には、先のやりとりで殺人予告と言われたのが引っかかってしまう。生身の人間を相手にしているような感覚を振り切れず、針生は渋々と Beige の提案を受け入れることにした。